

屋上の雨

松田 奈央貴

いつも感じている孤独感とは違うものを味わいたいという気持ちがあった。それともう一つ理由があり、大雨が降っているなかで、僕は屋上にいた。放課後なら皆、部活やら帰宅やらで屋上には誰も来ないだろうと思ったし、それに加えてこの大雨なので見られることもない。

僕はしばらく突っ立っていた。

こういうとき色々な思い出が頭を過ったりするのかもしれないけれど、僕の場合はそれがない。

ずっと独りだったから。特別な友人ができたわけでもなく、大切な恋人ができたこともない。今思えば本当に何もない人生だった。

数分ほどしていつもとは違うような孤独感には十分に浸れたので、次の目的を果たすことにする。

ゆっくりと屋上の端に向かって、足を一歩ずつ踏みだしていく

あと三步ほど歩けば僕の身体は重力に従って、屋上からコンクリートの地面へとまっすぐ落ちていく。高確率で死んでしまうだろう。でもこれでいい。誰かに強要されているわけではなく、自分で決めたことなのだから。

あと一歩で、この世界とはさようならだ。

「まだ若いのに、もったいないねー」

ザーザーという大雨が打ちつける音の中で、声が聞こえた。思わず声の聞こえた方向へ振り返る。

知らない顔、聞いたことのない声。思わず、

「誰……ですか？」

と問うた。

女子生徒。少しウエーブのかかった癖毛、ぱちりと丸い瞳。そして白い肌の手には傘が握られていた。ピンク色の傘と、黒い折り畳み傘。

ピンク色の方を差して、ニコニコと微笑みながらこちらに向かってくる。そして、黒い方を僕に差し出した。べつに傘が必要と思ったわけではないけれど、なんとなく受け取ってしまった。

「誰かって？ そりゃあ、この学校の生徒だよ」

そんなことは制服を着ている時点で分かっている。まあ、誰かと聞かれてそう答えるのも間違いではないのかもしれないけれど。

彼女は僕に傘を渡して満足そうな表情を浮かべており、それを見て、少しの苛立ちを覚えた。

この天気と時間帯ならここには誰も来ないと思っていたのに、それなのに。しかも、僕の

やろうとしていたことは止められてしまった。そんなことを考えていたら、心の中の苛立ちはどんどんと大きなものになっていき、やがて怒りへと姿を変えた。

「なんで止めたんだよ！」

いつもなら出さない大声と共に、湧き出た怒りを彼女にぶつける。

「そんな怒らなくてもいいじゃない。死のうとしていたんでしょ？ まだ若いのにもつたないよ」

お節介だ。こういう人は好きじゃない。

僕は彼女の言葉を無視して、再び足を踏み出す。でも、足は動かなかった。完全に止まってしまっている。

「どう？ もう死にたいなんて思わなくなったでしょう」

彼女の言う通りだった。少なくとも今はもう、自ら命を絶つなどという考えはなかった。なぜだろうか。あれだけ覚悟を決めていたというのに。でも、きっとまた屋上から飛び降りようとする日が来る。

「どうせ、また僕はここに来るよ」

「そうなの？ でも本当にもつたないと思う。病気とか患ってないでしょう？」

急に僕の健康状態を気にしてきた。何を考えてこんな発言をしているのか、まったく分からない。

とりあえず怒りが収まったところで、渡された黒い折り畳み傘を差す。

「べつに。病気なんてないけど」

「それなら、自ら人生を終わらせたらダメだよ。そういうのをしていいのは私みたいな人だけ」

この言い方だと、彼女は「病気を患っている」ということになるけれど、そういうことで合っているのだろうか。

「君は、病気を患っているの？」

「うん。もう治らないと思うよ」

そういうことを言うときは、真剣な表情で言うべきなのだろうけれど、彼女はニコニコと笑みを浮かべながら言った。こんなにも余裕のある表情ということは、嘘を吐いているのだろう。きっとそうだ。

「そう、僕はもう帰るよ」

本来ならば、家に帰る予定ではなかったけれども。

「傘、借りる」

素っ気ない態度で僕はそう言う。

「また、明日ね」

彼女は白い歯を見せて、まだ笑っている。

また明日。会うかどうかなんて分からないけれど。

僕の学校生活は、周りの人たちから見たらとても地味だと思う。休み時間はいつも音楽を聴いて過ごしているし、部活にも所属していないので、放課後になったらすぐに帰る。小さい頃からぼぼ独りで過ごしてきた十七年が経った。

周りの人たちは楽しそうに過ごしているのに、僕だけ独りぼっち。正直なところ寂しさを感じていた。

孤独さが頂点に達してしまったのと、僕の寂しさがどれだけのものかを見せつけたかったというのが理由で、昨日は屋上に足を運んで、そこから飛び降りようとしてしまったわけだ。

今日はとても良い天気であり、屋上に行ったらどの時間帯でも人はいそうさ。放課後なんて、もはや遊び場として使われているのかも分からない。

だから今日は屋上には行かない。

『キーンコンカンコン』

昼休みのチャイムが校内に鳴り響く、と同時に午前の授業が終わった。教室から人が溢れ出たが、そのほとんどが食堂に行くのだろうと思うと、僕は絶対に食堂に近づかない。基本的に人が多いのは苦手だ。そういう意識があるからいつまでも独りなのだろうけれど。

机の上に弁当を広げ、冷えた白米を口に運ぶ。このとき毎回思うのが、米は炊き立ての方が美味ということ。

そんな冷え切った弁当を、箸を休めることなく食べすすめていく。周りの談笑しながらゆっくり昼食を食べている姿を横目で見ると少し羨ましくなる。といっても、ご飯を食べるときくらいは独りでもいいと思う。自分のペースで食べられる。

そう考えると僕の方が有意義に時間を使っているのかもしれない。勝ち誇った気分を感じたと同時に、弁当を完食した。いつものようにスマートフォンで音楽を聴くために鞆からイヤホンを取り出そうとしたが、何かに引っ掛かった。

「あ」

それを見て思わず声が漏れてしまう。同時に、昨日の大雨と屋上での出来事が脳裏を過るとある女子生徒が貸してくれた黒い折り畳み傘は、まだ少し湿っているような気がした。それを見つめて僕は考える。

これをどうやって彼女に返そうか、と。名乗りもしてこなかったもので、名前が分からない。覚えてるのは顔の特徴と、余裕を持って浮かべていたあの笑顔。

僕の通う学校は一学年につき、五つのクラスが設けられている。彼女が必ずしも同じ学年とは限らないように、僕の所属するクラスにはいないので、僕は十四回も各教室のドアを開けて彼女を探さないといけないということになる。それに学校全体を探せる時間といえば昼休み。その昼休みだって、もしかすると教室にいない可能性だってある。ここはもうきっぱりと諦めることにしよう。

「おーい。葉山くん」

教室内が程よいざわつきで満たされている中でそれが聞こえたとき、幻聴かと思って自

分の耳を疑った。この教室内で僕の名前を呼ぶ人がいるとは思わなかったから。もしかしたら本当に幻聴なのかもしれない。もう一度、僕の名を呼ぶ声が聞こえるかどうか耳を澄ましてみることにする。

「葉山恵一くんってば」

今度はフルネームで呼ばれた。これはもう幻聴ではないと断定していいだろう。僕はここで初めて名前を呼ばれたと認識して、声の聞こえた方に視線を向ける。そこにいたのは、このクラスの人ではない、見覚えのある人だった。

彼女だ。僕が探そうとしてきつぱりと諦めた、女子生徒。

ゆつくりとこちらに近づいてくる。

「職員室に行くって勇気いるよね。葉山くんの名前を先生に伝えて、何組か聞いたんだ」
クラスだけを聞いたということは、僕と彼女は同じ学年ということだろう。

そして僕の名前を知っていたようで。でも、なぜ知っているのか。

「傘取りに来たんでしょ？ はい、返すよ」

とりあえず今は疑問を押し殺して、用事を済ませなければ。

僕が鞆の中から折り畳み傘を取り出すのを見て「ああ、そうだったね」と言った。てっきり傘を取りに来たのだと思ったのに、見当違いだったようだ。

だったら、なぜわざわざ僕を探してここまで来たのだろうか。理由を問おうとすると彼女が先に口を開いた。

「突然だけどき、今日葉山くんと一緒に来てほしいところがあるんだけど」

本当に突然だし、昨日知り合ったばかりなのに何でこんなにも親し気な態度を取れるのか疑問だった。

言われて気付いたが誰かと一緒にどこかに行くなんていうことは、ここ数年なかった。でも、昨日知り合ったばかりであるし、僕は彼女には良い印象は持っていない。

「悪いけど……」

「じゃあ、放課後また来るね」

そう言っただけで教室を出ていった。人の話を聞かないというのはまさにこういうことである。

午後の授業は指名されることもなかった。聞き流していた。そもそも、指名されることなんて滅多にない。もしかすると僕はクラスの人たちだけでなく教師からも、完全に「空気」という扱いになっているのかもしれない。

放課後になって、昼休みのとくと同じように教室から人が溢れ出る。部活に行く人、委員会に行く人、帰宅する人。いつもならその人たちの流れにのって教室を出るわけだが今日は違う。

「葉山くん」

もうすっかり聞き慣れた声である。こんなにも早く彼女がこちらの教室に来ると思っていなかった。机の中にしまっている教科書を鞆に

突つ込む。

「お待たせ、ところで僕をどこに連れていく気なの？」

「それは行つてからのお楽しみかな」

これは僕にとつてはどうでもいい場所に連れていかれる可能性が高い。お楽しみ、と言う人ほどそんなに良い場所には連れて行ってはくれない。今まで生きてきた人生で学んだことである。

「でも一つだけヒントをあげよう。これから連れていく場所はね、今の私にとつてはとても大事なところ」

ヒントと言うから少し期待をしたのに、全くヒントになっていない。

学校を出て、閑静な住宅街をも抜け、どこへ連れていかれるのやらと段々と不安になってくる。彼女の思考が読めない。いや、当たり前かもしれないけれど。

「ほら、あそこだよ」

しばらく歩いた後、彼女はとある建物を指差す。僕はそれを見て「ああ、そういうことかと呟いた。

差しているのは病院だった。それも小さなものではなく入院施設があるような大きいもの。彼女は何かしらの病気なのだろう。そう察して、それ以上は何も言わないようにした。

彼女も何も言おうとはしない。でも表情から何か言いたげなものだったのはよく分かった。院内に入ると、こういうところだから当たり前かもしれないけれど人が多い。その人の多さに圧倒されて、辺りを見回しておどおどしてしまう。

そうなっていると、彼女は「こつちだよ」と僕の肩をぽんと叩く。こういう大きな病院には行ったことがない健康な人間なもので、どうにも慣れない。

黙って彼女の後ろを歩いていると「消化器科」と、聞いたことはあっても行ったことはい科に辿り着いた。受付を済ませて近くの椅子に座る彼女。隣に座ったら？　と言わんばかりの顔と、隣の椅子をぽんと手を置くその所作に促されるまま、座った。

黙っているのも気まずいので、ずっと聞きたかったことを聞く。

「あかさ、君の名前は？」

「自己紹介って恥ずかしいからしたくないな」

せつかくこの空気をどうにかしようとしたというのに、そういう返事をするならば、こちらだってそれなりの対応をさせてもらう。

「そうですか」

「まあ、名前は今から呼ばれるからそのとき覚えてよ」

「そうですね」

とにかく素気ない態度を取る。彼女の方を一瞥すると、全く気にしている様子が出なかった。このままずっとこんな態度を取っていても口論にもならないのではないか、というくらい。でもそれはさすがに心が痛む。自分を落ち着かせるために小さく深呼吸をした。

「うーん、でもまあここまで一緒に来てくれたから、これだけは話しておくね」

僕がした小さい深呼吸よりも、深く息を吸って彼女はこう言った。

「私、肝臓の病気があるんだよね」

「え」

そのとき、受付にいる看護師が呼び出しをした。

「室井唯子さん、診察室にお入りください」

「じゃあ、ちょっと待っててね」

僕に背を向けて診察室に消えていく。すっかり忘れていたが僕は思いだした。昨日の屋上でした彼女とのやり取りを。

——君は、病気を患っているの？——

——うん。もう治らないと思うよ——

昨日確かに言っていた。

「もう、治らない」と。

診察室のドアを見つめること数十分。僕はその間、何も考えてはいなかった。何かを考えなかったものの、そうするとすぐに頭に彼女が過ってしまう。心配をしているとかそういうことではない。重い病気を患っている人を目の前にしていたというその事実だけが、ただ僕の脳内を埋め尽くしていた。

診察室のドアが開かれる。出てきたのはもちろん彼女だ。

「お待ちせ。じゃあ行こうか」

会計を済ませるためだろうか、消化器科から出て、ものすごく人が多かったところへと戻る。一気に騒がしさが耳に入っていく、また人の多さに圧倒されてしまう。

「さて、会計に呼ばれるまで時間があるのでここで問題です」

唐突に僕へ問題を出してくる。

「私の名前は何というでしょうか？」

そんなものか。数十分前に聞いたばかりなので余裕だ。

「室井唯子」

「うわ、急に呼び捨てにするの？」

彼女はけげなく笑いながらそうおどけてみせる。僕はそんな冗談についていけずに、何も反応ができなかった。ただ黙り込んでしまう。

「じゃあ、次の問題ね」

どうせ簡単な問題だろうに。

「私の余命はあとどれくらいでしょうか？」

それを聞いて思わず固まってしまう。口が硬直してしまい、思考も停止寸前になっていく。

この場合、ふざけて冗談を言うものではないだろう。かといって本気で彼女の余命を当てるのも何だか違う気がする。

「分からないよ、そんな重大なこと」

「お、重大って思ってくれているんだね。嬉しいよ」

「それで、答えは？」

僕の問いに答えようとしな。となれば残された時間は少ないのかもしれない。だから答えづらいというのがあるのだろう。

「答えは教えないよ。自分で考えるのが大事だからね」

そうやってごまかしながら、笑う。僕は分からない。その笑顔の裏は一体どんな感情があるのかということが。もしかすると心の底から笑っている可能性があるかもしれないけれど。

「じゃあ、最後の問題。なぜ私は職員室で『葉山恵一』という名前を先生に伝えられたのでしょうか？」

「知っていたから」

「ではなぜ知っていたのでしょうか？」

そうだった。今日抱えた疑問の一つにそれがあつたのを思い出した。彼女とは昨日会ったばかりで、教えていないのになぜか僕の名前を知っていた。

「僕のクラスに知り合いがいたから」

「葉山さんのクラスに知り合いはいないな」

「降参、分からないよ」

僕は考えることなく諦める。それを見て彼女はふふと笑い、

「答えは教えないよ。自分で考えましょう」

と、やっぱり答えは教えてくれなかった。こんなのも分るわけがない。疑問が残って何だか気持ちが悪く感じはしたけれど、こんなことに時間を割くのはもつたいないという結論に達して考えないようにした。

「室井唯子さーん」

会計の順番がきたようで、彼女の名前が呼ばれた。

「葉山くん、今日はありがとうね」

「僕は帰るよ。それじゃ」

「また明日ね」

彼女はそう言うと、小さく手を振りつつ微笑をたたえた。

病院の自動ドアを潜って振り返ると、ガラス越しに会計している姿が見える。

せっかく知り合ったけれど、もう二度と会うことはないと思う。

だって明日の天気は、また雨だから。

朝。

空はどんよりとしている。

僕は授業がもうすぐ始まるにも関わらず、屋上にいた。僕が目的を果たすための行動に移るにはまだ時間があり、条件もある。時間の目安としては一時間目のチャイムが鳴った後。条件は人がいないこと。そして、雨が降ることだ。

どうしても雨が降っていないとダメだというわけではないが、気分の問題である。これが晴天だったらどうにも気分が乗らない。雨が降っていて空がどんよりしているときこそ、怖がらずに行動に移れる。

『キーンコーンカーンコーン』

チャイムが鳴った。あとは雨が降るのを待つのみ。天気予報では午前中には必ず降ると言っていた。だからとにかく待つ。早く降ってほしいのだが、天気はどうすることもできない。だからせめて屋上に絶対に人が来ないであろう授業の時間を選んだのだ。

今頃、僕のクラスでは現代文の授業が行われている。でも先生は僕がいないことなんて気付かないと思う。何せ僕は空気みたいな存在だから。

空を見上げると、一粒の水滴が頬に伝った。雨だ。小雨からやがて大雨になっていく。制服が濡れてきたので、そろそろ行動に移すことにした。

一昨日のように一歩ずつ踏み出していく。

授業中なのでもう邪魔する人は誰もいない。そんなことを考えていると、とある人を思い出した。一昨日僕の邪魔をして、傘を差しだしてきたあの人。

「やあ、また会ったね」

声が聞こえて咄嗟に振り返る。なぜだろう。今は授業中のはずなのに。

「葉山くんは記憶力がないのかな？ 一昨日に『もったいないよ』って言ったばかりじゃん」
彼女だ。また邪魔をしにきたようで。それでも僕は止めない。前を向き直してまた一歩ずつ進み始める。

「もしもそのもったいないことを止めたら、昨日の問題の答えを教えてあげてもいいよ」
そこで足が止まってしまう。なぜだろうか。昨日の問題の答えなんて考えるのを止めるほどどうでもいいものだったはずなのに。足がもう動かない。動かそうとしても抵抗が生まれてしまっている。彼女のせいだ。また一昨日のように僕の心の底からふつふつと怒りが湧いてきた。

「なぜ邪魔をするの」

怒りに任せて大声は出したくなかったので、僕は感情を最大限に押し殺しつつ彼女に問うた。

「だって葉山くんには生きていて欲しいからね」

そう言っつてびしょびしょに濡れている僕に傘を差しだす。また一昨日と同じだ。彼女はピンク色の傘を差しており、黒い傘は僕に。

「私は何度でもこうやって傘を差しだすよ」

生きていて欲しい。ただそれだけの理由で僕にしつこくしてくるのだ。邪魔をするのだ。

そんなちっぽけな理由で、僕はまた目的を果たせなかった。

彼女が差し出してきた傘を受け取り、広げる。

傘に落ちていく雨の音が耳障りに感じてきた。それでも傘を差すことを僕は止めなかった。

「今日はもうさ、授業なんて受けずに一緒に出掛けない？」

「はい？」

唐突の誘いであり、その発言の真意が分からなかった。彼女が何をどう想って言ったのか。とりあえず僕は保健室に行つてジャージを借り、彼女は教室に戻つていった。

ジャージに着替えた後、僕は教室に戻ると見せかけてトイレに籠つていた。今から授業に出席するのはなんだか気が引ける。間違いなく先生に注意されるから。

一時間目終了のチャイムが鳴るまで、僕はトイレから出ないようにした。

「葉山くん、行こうか」

「ねえ、本当にこのまま学校を出るの？」

「うん。反省文は書かされるだろうけど」

一時間目の授業が終わつて、僕はジャージ姿で教室にいた。そこに彼女がやってきた状況だ。

「反省文なんて書きたくないんだけどな……」

そうやって呟きつつも、こっそりと帰る用意をしていた。教科書は机の中に置いておき、筆記用具と弁当を鞆に入れて教室を出た。

このとき改めて実感したが、僕はやはり空気だ。こうやって帰る用意をしていても誰も不思議そうな視線を送つてこない。それはそれで都合なのだけけど。

彼女も肩に鞆を下げて、帰る気満々だった。ここで僕は、二人揃つて学校を出ると危険性があることに気が付いた。

もしも二人で学校を出たとして、それが教師に見つかったときに言い訳ができない。一人だったら「早退します」と言つて学校を出られるが、二人して教師に見つかったときが問題だ。二人で口を揃えて「早退します」なんて言つたら怪しまれるに決まっている。僕はその危険性を感じ取り、彼女にこう言う。

「タイミングをずらして出よう」

すると不思議そうな顔で僕を見つめてきた。なぜ分からないのだろうか。とにかく、言い聞かせ僕らは時間を空けて学校を出た。

幸い誰にも声を掛けられずに済んだのでよかった。

傘を差しながら学校から離れていく。

「そういえば出掛けるところは決まっているの？」

「まあ、その辺をうろろしようよ」

雨が結構降っているので建物の中に入りたいのが本音ではあるが、それは口に出さなか

った。

「そうだ、公園にでも行かない？」

雨が降っているのに公園とは、なかなかの罰ゲームな気がする。それでも僕は黙って彼女についていくことにした。

学校から少し離れた公園にて、僕らは立ち話を始めた。

「さて、本題に入ろうか」

彼女がそう言うので、雨の音で聞こえづらいが話を聞くことにした。

「葉山くんは見事に自分の命を大事にしたから私は約束を果たすよ」

一時間ほど前に屋上での彼女の言葉を思い出した。昨日の問題の答えを教えてくださいということだった。正直、今はそんなに気になっていないけれど。

「うん」

「私が葉山くんの名前を知っていたのはね——」

雨の音で聞こえないなんてことがないように、耳を澄ませた。

「昔、葉山くんのが好きだったからだよ」

僕の聴力は異常がないはずだ。そして幻聴が聴こえてしまうほど疲れてもいない。それなのに、僕は自分の耳を疑ってしまう。彼女の言葉があまりにも衝撃的だったから。

「あの、ということは昔に僕と会っているってこと？」

「覚えてないんだね」

彼女の口調は明らかに悲し気な雰囲気を感じ出していた。でも本当に記憶がない。彼女とは一昨日に初めて会ったとしか思えない。

僕が悩めば悩むほど、彼女はどんどんと暗い表情になっていく。

「まあ、私が覚えているからそれでいいや」

「僕と君が初めて会ったのはいつ？」

「幼稚園の頃だよ」

時期を聞いてもやっぱり思い出せない。多分、幼稚園時代も独りで過ごしていたのだろう。でも覚えていないけれど。

でも思えば、昔からの友達というのは僕にはいない。ということはやはりそういうことなのだ。

「葉山くんはいつも独りでいたんだよ」

僕の推測は当たっていたようだ。

「私、そんな葉山くんのこと放っておけなくてね。だから……」

「だから？」

彼女の頬が赤らむ。何か恥ずかしいことでも言おうとしているのか分からないが、とにかく頬は朱色に染まっていた。

「私さ、声を掛けたんだよね。そしたら当時の葉山くん、何て言ったと思う？」

覚えてないことを分かっているのにそう聞いてくる彼女に、不思議と苛立ちは起きなか

った。でも思い出せない自分に対する苛立ちが少しある。

「当時の僕は、何て言ったの？」

「君も仲間なんだね、って言ってた。今でも鮮明に覚えてる」

仲間。当時の僕は何を思ってた。そんな恥ずかしいことを言ったのか。羞恥心の欠片もないとはこのことだ。もし過去に戻るのなら、そのときの僕の口を塞いで「恥ずかしいことを口に出したらダメだよ？」とそっと教えてあげたい。

しかし、そんなことを言うのには相当な理由があったはず。それを彼女は知っているのだろうか。

「ねえ、僕がなぜそんなことを言ったのか分かる？」

「私なりの解釈で良いなら話すよ」

「話してみて」

その解釈が分かりやすかろうがなかろうがどうでもいい。とりあえず話を聞いて、それをまた僕なりの解釈で受け止めれば良いと思ったから。

彼女のことだからちよっとおどけて話すと思ったのも理由の一つだ。

「多分だけど、私もそのとき独りぼっちだったからだと思うよ」

それを聞いた僕は驚いた、二つの理由で。一つは全くおどけずに真面目に話してくれたこと。もう一つは、こんなにも明るく前向きで僕とは正反対の彼女が、僕と同じ境遇にあったということだ。

「嘘だよね？」

「本当だよ」

言葉が上手く出てこない。こういうとき、どうすればいいのだろう。こんな状況になったことがないので反応に困る。とりあえず僕は、彼女の瞳を見つめる。不意に顔を背けるといふのは不自然な所作だと思ったから。

いや、急に見つめるというのもおかしいかもしれない。意識したら恥ずかしくなってやっぱり目を逸らしてしまう。

ここで一つ疑問が浮かんだので、視線を彼女の足元に向けたまま問うた。

「小学校とかも一緒だったりする？」

幼稚園が同じなら、その可能性もあると思った。

「ううん。小学校に入学する前に引越したから一緒じゃないよ。高校に入学する前にまたこっちに戻ってきたけど」

なるほど。と、疑問が氷解したところで静かな空気が流れる。話すことがない。

すると、その空気を破るかの如く彼女がまた口を開いた。

「それでもつとやうとね、今も独りぼっちなんだ」

今度は彼女が僕の方をじつと見つめて、続ける。

「いじめられているとかそういうわけじゃないんだよ？ 入学したあとから学校に行く回数よりも病院に行く回数が増えていってさ」

声音がせつないものになっていく。そして、

「気付いたら、独りだった」

せつなさはピークに達したと、勝手にそう思った。

「明日も雨だね」

彼女はスマートフォンを見て言う。

「もしかして、明日も屋上に行くの？」

せつなさは嘘だったかのように、微笑をたたえて僕に尋ねる。

そう、明日も雨なのである。天気予報を見たときに、しばらくは天気が崩れる、とあった。

「行くよ」

なぜ彼女にこう宣言してしまったのだろう。また邪魔されると分かっているのに。

明日は屋上で彼女に何を言われようと僕は、足を止めないことを決意した。

天気予報通り、雨が降ってきた朝。

僕は職員室にて、担任に説教をされていた。

「葉山、お前は授業を無断欠席するような生徒じゃないはずだろう？」

「すみませんでした」

ひたすら謝った。叱られるのが怖いわけではなくて、早くこの場から去りたい。だって、職員室にいる先生のほとんどがこちらに視線を向けているから。こんなに注目されるのは人生で初めてかもしれないし、慣れていないのもものすごく恥ずかしい。

「何かあったのか？」

「すみませー……。え？」

問われたのに思わずまた謝ろうとしてしまった。

「お前は目立つタイプじゃないから、授業を受けないなんてことをするのは何か理由があると思ったんだ」

担任は僕が屋上に行ったことは知らないようで、あくまでも無断欠席したことについて聞いてくる。でもそれは結局、屋上に行ったことに辿り着く。

だから僕は何も言えない。

「いえ、何もあります。すみませんでした」

そう言うと、担任は机の引き出しから紙を取り出す。「反省文用紙」とある。

まあ、これを書かされることを予想はついていたので驚くことはない。僕はそれを受け取るうと手を差し出した。

「いや、やっぱりいいや」

反省文用紙は元にあった引き出しに戻された。そして、

「俺はお前を信じているからな。これからは二度とするなよ？」

予想外すぎる展開で、これには驚いてしまう。この人はこんなに優しい人だったのだろうか。授業はきちんと出ることにして、放課後に屋上に行くことにした。

教室に入ると、いつも通りの騒がしさがそこにあり、やはりそれに馴染むことのできない自分もそこにいた。

ここにいたくない、という気持ちだけが心の中にじわじわと広がっていく。その日はただただ、放課後を待った。

午後の授業が終わってチャイムが鳴り響く。帰りのホームルームもいつも通りに終わり、僕は一番に教室を出た。でも歩く速さはいつもより遅い気がする。それがなぜなのかは自分でも分からないけれど。

階段を一步一步、丁寧に上がる。ふと後ろを見て誰も来ていないのを確認した。誰も来ていない。

今日でこの学校ともお別れである。

階段を上り終え、屋上へ来た。それほどというわけではないが雨は降っている。誰もいないことを確認して足を踏み出していく。

あと一步踏み出せば、ここから落ちる。

ここから落ちれば、全てが終わる。

全てが終われば、何もかもなくなる。

何もかもなくなれば、僕は――。

「どうしたの？ 落ちないの？」

もうこれで三度目だ。僕がこういう行為をするのも、そしてこうやってこのタイミングで声を掛けられるのも。

後ろを見る。想像通り、ピンク色の傘を差している彼女が立っていた。相変わらずの笑顔を浮かべながら。

「今日以降はしばらく雨が降らないらしいよ。さあ、どうする？」

そんなことを知らされたら、もう今日しかないと思う。それでも僕の足は固まって動かなかった。あと一步が、出ない。

「その足を踏み出す前に、私の話を少し聞いて」

話なんて何度聞いたことか。それでも僕はなぜか耳を傾けてしまう。

「葉山くんは、もう独りじゃないよ」

何の根拠と自信があつてそんなことが言えるのだろうか。そして僕の何が分かるというのか。心の片隅から怒りが湧いてくる。彼女に対するこの感情も三度目だ。

「私がいるじゃん」

彼女らしからぬ言葉だったが、それが耳に残った。

「それとも私じゃダメかな？」

どういう意味で言っているかは分かっている。でも、その言葉がどうにも飲み込めない。

表情は真剣そのものであるので、何か言わなければと焦ってしまふ。

「いいんじゃないかな」

咄嗟に出た言葉がそれだった。

すると、彼女の頬には一粒の涙が伝う。雨かと思っただけれど傘を差しているので、これは涙であると確信した。それに表情がくしゃくしゃになっていった。

「だったら、もうこんなところに来るのはやめようよ」

声が震えており、声音も暗かった。いつもの彼女ではないということとは声を聞いても分かるし、表情を見ても分かった。

「僕のことなんかで泣くのは涙がもつたいたいと思う」

「そんなことない」

「何で？」

「そういうの、もう聞かなくても分かるでしょ？」

涙が零れていく目を擦る彼女。分かっている。彼女の言いたいことは十分に理解していた。それでも僕は自信がないから答え合わせをしたかった。

「君が僕のために泣いている理由を当ててみてもいいかな？」

問うと、泣きながら頷いてくれた。言うのが少し恥ずかしいが、はっきりと口に出すことが大事だと思った。僕は小さく深呼吸をして口を開く。

「君は、僕のことを友達と見てくれている……から？」

最後に語尾を上げて疑問形にしたのは失敗だったかもしれない。ちゃんと言い切った方が良かった気がする。

けれど伝わっただろうからよしとする。対する彼女は涙目ではあるが涙は止まっており、くしゃくしゃだった表情は軽く驚いたようなものになっている。もしかして、僕の言ったことは間違いだっただろうか。だとしたら恥ずかしすぎる。

「まあ、そうとも取れるよね」

表情の変化が激しい。急に悲しそうなものになった。

「答えはね、今の私の葉山くんに対する気持ちは、昔と同じっていうことだよ」

少しばかり頭を使うような言い方だったけれど、今日の僕は頭の回転が速かった。彼女の発言の真意が分かったその刹那、僕は少々驚く。

「つまりさ、君は僕のことを——」

「そう、そういうこと」

静寂。それが流れているときには、もう雨は止んでいた。

何も言うことができない。何か言うべきなのは分かっているのに。こういう体験は初めてなので、どうしたらいいのか本当に分からない。

「返事はしなくてもいいよ。ただ伝えたかっただけだから」

「え、あ、うん」

「また明日ね」

彼女は屋上から去っていった。

また制服が濡れてしまっているので親への言い訳を考えながら、僕は家に帰った。

天気予報を見たところ、彼女の言う通りしばらく雨は降らず快晴が続くとのことだった。僕はいつも通り、目立たずに学校生活を送っていた。

今日は屋上には行かないし、行く気もない。快晴だからというのと、もう一つ理由がある。彼女のことが頭を過るとのことだ。

これが理由として成立するのかどうかは分からないけれど、彼女がストッパーになっている部分が少なからずあるので理由としている。

今頃どうしているだろうか。クラスが違うのでそういうことが分からないのが現状である。

その胸の引っかかりを取る方法は一つあるけれど。

スマートフォン画面を見る。

朝のホームルームまでまだ十分に時間があるので、この胸の違和感を取り除きに行くことにした。

向かったのは職員室である。

「どうした葉山？」

「とある人を探してしまして。室井唯子さんっていう人なんですけど」

そう担任に伝える。

「ちょっと待っていてくれ」

職員室という生徒にとっては緊張感が漂うこの場所ですばらく待っていると、

「ああ、四組の生徒だな」

「ありがとうございます」

静かに礼を言って、職員室を出る。次は四組の教室に早歩きで向かう。朝のホームルームが始まる前にその教室に向かいたい。

階段をつまづかない程度に早く上がっていく。遂には一段飛ばしで上がっていた。

朝のホームルームまであと十分といたところか。体感時間はそんなものだった。四組の教室が見えてきたところで早歩きを止めた。少々乱れた制服を整えてドアの前に立つ。

ごほん、と咳払いをして大きな声で彼女の名前を呼ぼうと思ったがそんな勇氣は出ない。偶然近くにいた四組の女子生徒に声を掛ける。

「あの……」

全く気づいてもらえない。というか僕の声が小さすぎるのだろう。少しばかりは恥をかいでもいいかもしれない。僕はいつもより大きめな声を出した。

「あのー！」

そこにいた女子生徒は驚いた顔でこちらを見る。ちょっと声のボリュームが大きすぎたのだろうか。それでも気づいてもらえたのでよしとしよう。用件を伝えることにした。

「えっと、室井唯子さんっていますか？」

「室井さん……？ ああ、室井さんか！ まだ来ていないみたいだけど。何か用だった？」

「あ、いえ特に何も。ありがとうございます」

なんで僕は同級生に対して敬語を使っているのだろう。こういうときにコミュニケーション能力は大事だと気付かされる。

そんなことを考えながら自分のクラスの教室に戻ると、ホームルーム五分前だったのに気が付いてすぐさま着席した。それと同時に、この時間に学校に来ていないということは欠席なのだろうな、と思った。

それにしても、僕は何をするために四組に行ったのか。彼女のことを気になったなんて理由にはならない気がする。でも実際、その他に何も無いのだけれど。

こんなにも彼女を気になっている理由は何だろうか。変に意識をしまっているのかもしれない。あのときに言われた言葉を思い出した。

——今の私の葉山くんに対する気持ちは、昔と同じっていうことだよ——

つまり、ストレートに言ってしまえば彼女は僕のが好きということだ。

返事はしなくてもいい、と言われたから何も言わなかった。でも、このまま中途半端なままの状態は何だか気持ちが悪い。はっきりとしたい。

そのためには自分の気持ちを明確にする必要がある。僕は彼女のことをどう思っているのか。

この学校で初めて会ったときは、嫌なやつだと思った。僕の行動を邪魔してきたから。病院に一緒に行ったときは何とも思わなかった。病気には驚いたけれど。

もう一度、屋上で会ったときも嫌なやつだと思った。これも初めて会ったときと同じだ。でもその後、学校を無断欠席して公園に行ったのは悪い気はしなかった。

昨日の屋上での出来事。僕はあのとき、足が固まっていた。そして彼女が僕のために泣いた。

そうだ。僕なんかのために涙を流していたのだ。今考えればそれはすごく優しい行為だと思う。今までそんな人と出会ったことがあっただろうか。いや、一度もない。

彼女はふざけた一面もあれば、とても優しい一面もある。もしかすると、良い友達になれるかもしれない。

これを彼女に伝えなければいけないという使命感に駆られた。

しかし欠席しているのであれば今日伝えることはできそうにない。連絡先も知らないからどうしようもない。彼女が登校する日を待つしかない。

「じゃあ、今日も一日頑張るよ」

考え事をしていたら朝のホームルームが終わっていた。

今日も一日が始まる。

「おい葉山。呼ばれてるぞ」

担任の野太い声が僕の耳に入り、聞こえた方を向くと彼女がいた。

「あ」

思わず声が零れる。

「授業が始まる前に話を終わらせるよ？」

担任にそう言われて、僕は彼女に伝えたかったことをさっそく伝えることにした。

「欠席かと思っていたよ」

「学校に来る前に病院に寄ったの。それでね、ちょっと話したいことがあるからここに来たの」

それは僕も同じ。まずは彼女を優先させることにした。

下を向きながら、はー、と溜息を吐く。そしてこちらを真っ直ぐに見つめて口を開いた。

「もう葉山くんとは会いたくない」

「え？」

僕が知っている彼女らしからぬ言葉、というのが当てはまるだろうか。こんなことを言われるなんて思ったことがなくて、動揺が隠せない。

「えっと、その……」

頭が真っ白になっていた。脳内で「言葉が浮かんでは消える」が繰り返される。

もう、何も言わない方が良さそうだ。

「分かった」

たったそれだけを言っただけなのに、疲労感を覚えた。頭を捻って考え出したその言葉はシンプルではあるものの、今の状況には適したものだと思った。

彼女は僕の言葉に何の反応も示さずに、ただ僕の元から去っていく。僕も彼女の背中を見ずに着席をした。

形容し難い感情。僕の心はまさにそれだった。

その日、授業の内容なんて頭に入るわけがなかった。

放課後になっても僕の心は穴が開いたようなもので、感情なんてものは消えたのではないかと思うほどであった。

とりあえず帰ることにした。

頭がぼーつとする。視界も心なしかぼんやりとしているような。靴箱から学校指定の外靴を取り出すと、ひらりと何かが落ちた。一枚の白い紙。誰かが僕の靴箱にごみを入れたのだろうか。

よく見るとそれには何かが書いてある。

とても綺麗な字で、読みやすいものだった。

紙には電話番号が書かれており、そしてその下には『葉山くんはこの番号に掛けるべき』と謎のメッセージが書いてある。

誰のいたずらだろうか、なんて考えなくても分かる。

この学校で僕にこんなことを出来る人なんて一人しかない。強い確信を持ってその番号に電話をした。

呼び出し音が三回くらい鳴ったあと、相手は電話に出た。

『お、さっそく掛けてくれたんだね』

「やっぱり君だったんだね」

僕の強い確信は当たっていたよう。電話に出たのは彼女だった。

「会いたくない相手に、なぜ電話番号を教えたの？」

『電話なら顔を合わせないからね。ところで私が今どこにいるか分かるかな？』

「分からないよ」

『正解は、私が初めて葉山くんの問題を出したところでした』

普通に病院と言えればいいのに。遠回しに言う必要性は皆無な気がするけれど、彼女はそういう人だ。そこに関しては文句を言わない。

「それで、何でそこにいるの？」

『そりゃ、病気だからだよ』

それは知っているけれど。聞きたいのはそういうことじゃない。

「今朝は学校にいたのに、何で病院にいるの？」

『ああ、入院する前にクラスの人たちにあいさつをしていただけだよ』

入院、と聞いて僕はそこまで驚かなかった。それ以上に衝撃的な発言を彼女の口から直接聞いていたから。

もう、彼女の病気は治らない。その言葉が脳裏に過った。

『それと今朝、ひどいこと言ってごめん』

今朝のことについては発言の真意を理解できていない。なので、問うた。

「謝るってことは、あの言葉には何か理由があるんだよね？」

『うん。でも言うのは恥ずかしいかもしれない』

「気になるんだけど」

彼女の羞恥心より僕の疑問の方が強いと思う。

だからここは何としても、それを氷解させたい。

『私、死ぬ覚悟ができているの』

「え？」

『だけど葉山くんに会ってしまうともっと生きたいって思っちゃう。なぜなら私は——』

「ふざけるなよ」

このときの僕の気持ちは、屋上で彼女と会ったときのものと全く同じだった。

感情を押し殺すには無理があった。

「どうしてそういうことが言えるんだよ、君を失いたくない人のことをもっと考えろよ！」
思わず声を荒げてしまう。

『私は独りぼっちなんだよ？ 誰も私を失いたくないなんて思っていないよ』

「君がいなくなったら、誰が僕を好きでいてくれるんだよ！」

その刹那、ふと我に返った。僕はとんでもないことを言ってしまった気がする。咄嗟にこまかした。

「あ、えっと今のは……」

『ふふふっ』

笑い声。聞いていて不快じゃなく、むしろ心地よいものだった。

彼女は僕の発言に笑っているのだ。顔が熱くなってきた。

『分かったよ』

「えっと、何が？」

『葉山くんのためにも、生きてみせるよ。じゃあね』

電話はそこで切れた。

冷静になって自分の発言を振り返ると、相当恥ずかしいことを言っていた。でも、あの言葉は咄嗟に出たもの。ということはそれが僕の本心に近いということであろう。という結論に至ると、僕はあることに気が付いた。

彼女に好きでいてほしい、ということ。

胸が妙にもやもやとし始める。それは初めて体験するものではあるけれど、僕は何なのかを知っている。

これはきつと、そういうことなのだろう。

スズメのうるさい朝。

目覚めて僕は気付いた、今日が休日だということに。枕元のデジタル時計を見ると、午前八時と表示されている。平日でこの時間に起きると遅刻間違いなしだ。

しばらく休日特有の余裕さに浸っていると、スマートフォンの着信音が鳴った。画面を見て、僕は応答しようか迷った。着信は彼女からだ。無視というのもひどい気がしたので、とりあえず応答した。

「もしもし」

『葉山くん、今日時間ある？』

「まあ、あるよ」

「じゃあさ、病院に来てくれないかな」

彼女は僕に入院している病院名とその病室を伝えて電話を切った。僕はゆっくり身支度を始めて、その三十分後くらいに病院に到着した。

彼女がいる病院は先日、僕も一緒にについていったところだったので、もう人の多さに圧倒されることはなかった。

受付で面会手続きを済ませて電話で言われた病室に向かうと、

「遅かったねー」

手を振って笑う彼女がいた。

元氣そうでよかったと思っただが、どうやらそうでもないらしい。口元が震えている。

「無理しなくてもいいよ」

近寄りつつそう言っても、笑うのを止めなかった。無理をさせないようにするために、あまり長居はしないように決めた。

「それで、病院に来たけれど……。何かあった？」

「こういうことすると、葉山くんはまた怒るかもしれないけれどさ」

彼女は黒い折り畳み傘を僕に差し出した。前にも渡されたそれを持つ手は震えている。そこで僕は改めて、彼女の余命は短いのだと再確認した。

「どうということ？」

「もしも私がいなくなつて雨が降つても、傘は自分で差してよね。つてこと」

「傘くらい自分で差せるよ」

「そうだよ。まあ、この傘を受け取っておくれ」

そうやつておどける彼女がまだ何か言いたげな表情なのは見てとれる。自分からは言いづらいことなのだろうから、僕から問う。

「まだ言いたいことあるんだよね？」

「よくお分かりで」

「言ってみて」

これだけ聞いたら今日はもう帰ろう。その代わり、今から言われる言葉にしっかりと返事をする。

「私、本当は返事が欲しかったの」

「返事？」

「そう、葉山くんへの私の気持ち。その返事」

彼女は僕のことを好きでいてくれている。

そして僕は彼女に好きでいてほしいと思っっている。

ならば、返事なんて一択しかないだろう。

無駄な言葉などいらぬ。ただ想いを伝えるだけでいいのだ。

「僕もだよ」

彼女の瞳が潤んでいるけれど、構わず続ける。

「僕も君のことが、好きだ」

言った。僕は自分の気持ちを言ったのだ。

もう、何も恥じることはない。逆にこういふときに自分の気持ちを正直に伝えられないところぞ恥だ。

「何で私は病氣なんだろうね」

震えた声で言う。

丸い瞳からはぼろぼろと涙が零れていく。

「病気じゃなかったら、私、最高に幸せなのになあ……」

こういうときは、男なら優しく慰めるのが定石かもしれない。でもそんなこと無理だった。だってそうだろうに。

「うっ、うっ……」

男の僕でさえ、泣いてしまうような状況なのだから。

その日僕らは、初めてお互いに涙を見せ合って、初めてお互いに気持ちを通じ合った。

その日以降、僕は毎日彼女の元にお見舞いに行った。容赦なく病気は猛威を振るって彼女を苦しめた。

やがて会話が出来ないほどになってしまったが、それでも僕は学校が終わればすぐに彼女の元に向かった。

学校で起こったどうでもいい出来事を僕がひたすら話す日があれば、何も話さずにただただ一緒にいるという日もあった。

彼女のご両親が来る日も多く少し気まずさがあったけれど、とても良い人だったので仲よくなれた。

ある日、彼女が目を開けて僕の名を呼んだ。

「はや、まくん」

そのとき、彼女のお母さんは泣きながら彼女の名を呼んだけれど、お父さんがそれを止めた。彼女が話したい相手は僕だからという理由で。少し申し訳ない気持ちになりながらも僕は彼女の言葉を聞き取る。

「さよ、なら……。ありがと」

気付けば僕も泣いてしまっていた。涙がぼろぼろと頬を伝い、彼女が寝ているベッドに落ちていく。そして、

「それは僕のセリフだよ――」

嗚咽を漏らして続ける。

「屋上で、僕を救ってくれてありがとう」

僕の肩を強く掴んだのは彼女のお父さんだった。黙って首を縦に振り、やがて泣き崩れた。

彼女は目を閉じて安らかに眠った。

数日後。

僕は雨が降っている中、屋上にいた。

飛び降りようなんて目的で来たわけではない。そもそももうそんなことをしようとは思わない。

黒い折り畳み傘を差して、そこから見える街を眺める。

そして、彼女の全てを思い出す。

言葉、笑顔、差し出してくれた傘。

それら全てに温かみを感じる。

屋上の冷たい雨でその温かみを冷まされることはなく、逆に僕に強い決心をさせてくれた。

彼女の分まで精一杯生きるといふ決心を。